朝鮮王朝「背徳の王宮」

1冊でつかむ韓国時代劇の真髄！

康熙奉
Kang Hibong

愛と欲望の王宮で何が起こったのか？

韓国時代劇の舞台となった
朝鮮王朝500年の
裏面史

背景を知ればもっと面白い！

朝鮮王朝「背徳の王宮」

1冊でつかむ韓国時代劇の真髄！

康熙奉

星海社

298

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに　朝鮮王朝の建国を飾った初代王妃の物語

朝鮮王朝を建国したのは李成桂（イ・ソンゲ）という男だ。

高麗（コリョ）王朝末期の将軍で、明との領土争いの過程で国王に反旗を翻して最高実力者にのしあがった。その末に、高麗王朝を滅ぼして１３９２年に自ら新しい王朝を開いた。

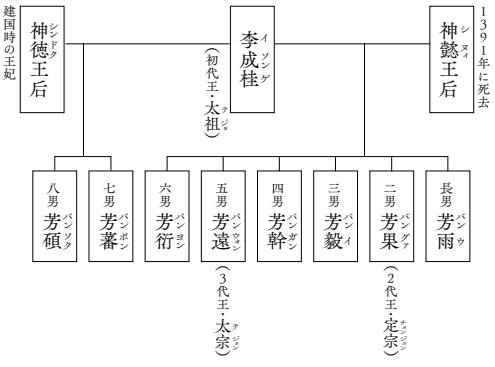
こうして朝鮮王朝の初代王・太祖（テジョ）となった李成桂。彼の最初の妻は神懿（シヌィ）王后であった。李成桂が出世する前から夫を支え続けた「糟糠の妻」だ。

この夫婦は6男2女をもうけている。息子は年長から言うと、芳雨（バンウ）、芳果（バングア）、芳毅（バンイ）、芳幹（バンガン）、芳遠（バンウォン）、芳衍（バンヨン）となる。

とはいえ、李成桂の息子はこの6人だけではなかった。彼の二番目の妻が神徳（シンドク）王后であり、彼女が芳蕃（バンボン）、芳碩（バンソク）という2人の男子を産んでいた。結局、李成桂は2人の妻との間に8人の息子がいたのである。

高麗王朝は一夫多妻制だった。なにしろ、初代王の王建（ワン・ゴン）が建国当時に地方豪族を懐柔するために政略結婚を繰り返し、30人ほどの妻がいたと言われている。初代王が多妻制を実践していただけに、王朝が続いているかぎり、その制度が維持された。特に、出世した男性は都で2人目の妻を娶（めと）る例が多かった。当時は「京妻（都にいる妻という意味）」と呼ばれていた。まさに、神徳王后が「京妻」であった。彼女は神懿王后に比べるとはるかに有力な家柄の出身であり、実家の権勢は李成桂にも大きな影響を与えていた。

なお、李成桂の最初の妻は「神懿王后」として王妃に列せられているが、1391年に54歳で亡くなっている。夫が国王となる1年前のことだ。つまり、朝鮮王朝が建国されて最初の王妃になったのは神徳王后のほうだった。このように、神懿王后は実際に王后として生きた経験のない「追尊された王妃」であった。この事実を念頭に置いて次に起こった出来事を説明していきたい。



国王になった李成桂が真っ先にやらなければならなかったのは、世子（セジャ／国王の正式な後継者）を選ぶことだった。すでに李成桂は57歳になっていて、健康状態に不安があった。王朝を継続させるためにも信頼できる後継者がぜひ必要だったのだ。

誰が見ても世子にふさわしいのは、五男の芳遠である。兄弟の中で人物の出来が一番良かったし、高麗王朝を倒す過程で芳遠は李成桂の政敵を徹底的に排除していた。彼の貢献度はとても高かった。

当の芳遠も自分が世子に選ばれると確信していた。そのときは25歳。自信がみなぎっていた。

しかし、芳遠にとって信じられないことが起こった。李成桂が選んだのが、八男の芳碩だったのだ。わずか10歳で、芳遠から見れば鼻たれ小僧にすぎなかったのだが……。

この決定は王朝を混乱させた。何よりも、15歳も下の異母弟が世子に決まって、芳遠の落胆が果てしなかった。

誰もが疑問を持つ決定。なぜ李成桂はそんなことをしてしまったのか。ひとえに、神徳王后の嘆願を受け入れたからだ。老齢に入ってきた李成桂は神徳王后を異様なほどに寵愛し、彼女の意向を無視できない精神状態になっていた。その末に、彼は神徳王后が産んだ

息子2人を偏愛するに至っていた。
そうであるなら、年齢からして七男の芳蕃を後継者にするのが筋だった。しかし、この息子は能力的に劣っていて、とうてい2代王をまかせられる器ではなかった。反対に、芳碩は幼少から頭脳明晰で後継ぎとしてふさわしかった。いずれにしても李成桂は、神徳王后が産んだ息子を後継ぎにするという誤った選択をした。王朝を建国するほどの英傑も、肝心な場面で私情をはさみすぎていた。
とばっちりを受けた芳遠が黙って見過ごすはずがなかった。彼は父に対して何度も翻意を促したが、神徳王后に魂を抜かれた李成桂は聞く耳を持たなかった。
絶望した芳遠。彼の怒りの矛先が神徳王后に向かった。彼は継母が黒幕だと思い込み、彼女への反感を強めた。
しかし、芳遠の立場は弱くなる一方だった。それは、神徳王后の威光が高まった結果でもあった。彼女は国王が寵愛してくれる立場を最大限に生かし、有力な高官たちを味方に引き入れて、芳碩の世子としての身分を盤石に固めていった。
さしもの芳遠も出番がないと思われた……その矢先に、神徳王后が40歳で世を去った。1396年のことである。

彼女は死ぬ間際まで世子の将来を案じていた。

「自分が死んだら芳遠がどんな手を使ってでも世子の座を狙ってくる」

そのことを神徳王后は察していた。それだけに、彼女は側近に対して芳遠を極度に警戒することを厳命していた。その上で、神徳王后は自分が世子を守り切れないことを悔やみながら世を去った。

そのとき、李成桂はどうしていたのか。彼は寵愛する妻を失って嘆き悲しみ、政治の表舞台から退こうとしていた。そんな初代王の凋落は、芳遠にとって願ってもない好機を呼んだ。

彼はじっくりと時期を選んで、１３９８年に決起した。まず、芳碩の後ろ楯となっていた鄭道伝（チョン・ドジョン／李成桂が最も信頼を寄せた側近）を殺し、次いで、芳蕃と芳碩を襲って一気に殺害した。

病床にあった李成桂は、王朝に起こった「骨肉の殺戮（さつりく）」に絶望し、王位に就いていることもできなくなった。

こうして王朝最大の実力者となった芳遠だが、彼は用心深い性格を見せた。自ら異母弟たちを殺してすぐに国王になるという性急な姿を避けたのだ。まずはつなぎで兄の芳果を

威厳を保つ正殿の玉座

玉座をめぐって骨肉の争いが数多く起きている

2代王につけるという慎重な姿勢を見せたあと、１４００年にようやく朝鮮王朝の3代王・太宗（テジョン）となった。

彼は実力者にふさわしい政治的資質を発揮して、建国まもない朝鮮王朝の基盤整備を成し遂げた。まさに「大王」の風格を持った国王であった。

同時に、これほど執念深い男はいない、と周囲を驚嘆させるところがあった。その執着は、すでに世を去っている神徳王后に向けられた。

一応、李成桂が存命中は事を荒立てなかったが、１４０８年に父が73歳で世を去ると、太宗は神徳王后への憎悪をむき出しにした。彼女の王妃としての祭祀をことごとく廃止させ、都の中心部に最高の格式でつくられた陵墓を次々に移転して縮小させた。最終的には、陵墓を徹底的に破壊し、初代王妃の名誉を著しく傷つけた。以後、神徳王后の墓は、みすぼらしく放置されたままだった。しかも、彼女の来歴も抹消され、まるで「存在したことがない」かのような扱いとなった。

大王になった後も継母への怨みをこれでもかと見せつける太宗。彼の復讐への執念深さは、王宮で栄華を誇った女性たちがいずれこうむる哀しさを寒々と暗示していた。

目次

はじめに　朝鮮王朝の建国を飾った初代王妃の物語　3

第1章　禁断の宮殿で愛と欲望はどれほど壮絶だったか　19

1　「名君の嫁」はなぜ王宮で背徳の行為に溺れたのか　20
2　女官にとって厳禁となっていた「鉄の掟」とは？　23
3　伝説の医女が王妃を気遣って犯した規則違反が強烈だ　26
4　中宗の臨終を看取った大物は意外な人物だった!?　28
5　側室同士の強烈なライバル対決の結末は？　31
6　国王に寵愛された側室の栄光と喪失は隣り合わせ！　37
7　哲仁王后の性格はドラマとどのように違うのか　39
8　偉大な国王なのに「人間不信」に陥っていた？　41

9 燕山君の最期は『朝鮮王朝実録』でどう記されたか 43
10 側室同士の品階獲得競争があまりに熾烈だった 45
11 王宮を出される女官の境遇は涙なくして語れない 49

第2章 朝鮮王朝を震撼させた悪女たちの所業を暴く 51

1 悪役が似合いすぎる和緩翁主は哀しい王女なのか 52
2 張禧嬪が仁顕王后をいじめた方法に仰天！ 55
3 あまりにひどい悪女と思われた王妃の本当の姿は？ 59
4 ここまで憎まれた側室の哀れな末路は自業自得!? 62
5 「善人」仁宗を襲った「冷血」文定王后の罠がひどい 64
6 鄭蘭貞は一番恥ずかしき「最悪の手先」だった 67
7 権力を裏で操った金介屎がたどった最期の運命とは？ 69
8 イ・サンの母の悪評は史実に合っていたのか 73
9 韓国で有名なイ・サン毒殺説の首謀者は「あの人」 76

第3章 国王と王妃は虚構の中で何を嘆いたのか 79

1 光海君が廃位になったのは「暴君」だったから？ 80
2 仁穆王后はなぜ光海君の斬首に執着したのか 83
3 一夫一婦制で4回結婚した唯一の国王は予想通りの人 87
4 英祖は母親の身分が低かったことを極端に恥じていた 92
5 「弱き国王」の代名詞になったダメ男が歴史上にいた!? 94
6 国王の名前に「祖・宗・君」が付くのはなぜか 96
7 哲宗はあまりに情けない「操り人形」だった？ 99
8 せっかく国王になっても短命だった3人の顔ぶれは？ 102
9 仁顕王后が張禧嬪を激しく叩いたことに驚いた！ 105
10 中宗の恩人だった王妃が廃妃にされたのはなぜ？ 109
11 大妃の罠にかかった不敬罪の元王妃！ 114
12 男の魂が乗り移った王妃は果たして懐妊したのか 119

第4章 怨みと裏切りと復讐の果てに何が起こったか 121
1 即位直後の英祖を危機に陥れた「李麟佐の乱」 122
2 王朝の歴史を汚した悪党高官の罪状を告発する 125
3 綾陽君は弟を殺された復讐のために反乱を狙った 127
4 父王が世子を毒殺した根拠はどこにある？ 130
5 国王毒殺未遂のアワビ事件は明らかに捏造された 132
6 イ・サンに露骨に反逆した急先鋒が意外だった 134
7 「名君」世宗の妻はどんな地獄を味わったのか 136
8 「嫉妬深い」だけで国王が王妃を離縁できるのか 138
第5章 悲劇の連鎖で哀しみは終わらない！ 141
1 大王が妻の実家を滅ぼしたのはやりすぎだった 142
2 最高の芸術家だった天才王子の理不尽な最期！ 144

3 離縁された端敬王后は再び中宗に会えたのか 146
4 王位争奪戦の行方はついに辛い結末を迎えた 149
5 イ・サンの妻は「聖女」と呼ばれた人格者だった 151
6 政略の末に側室となった哀れな元嬪はどうなった？ 155
7 光海君が糾弾された理由は果たして正当？ 157
8 悲しみの妻を誰がなぐさめてくれるのか 159
9 光海君は島流しの屈辱を必死に耐え抜いた 162

第6章 史実を知るとドラマがもっと面白くなる 165

1 英祖に寵愛された側室の映嬪はどんな女性か 166
2 王朝一番の美女と言われた王女の波乱万丈な物語 169
3 禁婚令の末に実施される「カンテク」はどんな儀式？ 174
4 朝鮮王朝の後期に「王族の少子化」が深刻になった 176
5 朝鮮王朝の歴史で「史上最高の世子」は誰だったのか 178

6 民衆の救世主になった王女の知られざる逸話！ 180
7 淑嬪・崔氏をめぐる闇はどこまで深いのか 183
8 激しい派閥闘争はとんでもない形で終焉していく 186
9 英祖を悩ませた景宗毒殺説はなぜ起こったのか 188
10 王妃が自分で料理を作ることが果たして可能なのか 193
11 イ・サンの暗殺を狙う刺客集団が王宮に侵入！ 196
12 国王の求愛を拒絶した宮女の壮絶な覚悟とは？ 198

おわりに 背徳の王宮から遠く離れて何を思うのか 201

巻末特集「5大王宮の成り立ち」 206
1 王宮の一般的な配置状況 206
2 景福宮 208

3 昌徳宮 210
4 昌慶宮 212
5 徳寿宮 214
6 慶熙宮 218

朝鮮王朝の歴史年表 220
朝鮮王朝の歴代国王 230
朝鮮王朝の歴代王妃 232

〔資料〕

李成桂に関する人物相関図 4
粛宗に関する人物相関図 31
世祖に関する人物相関図 61
中宗と文定王后に関する人物相関図 65
光海君に関する人物相関図 81

純元王后に関する人物相関図 100
仁祖に関する人物相関図 131
英祖に関する人物相関図 167
首都の城内図 207

写真／植村誠、井上孝、ハン・スンウン、康熙奉　イラスト／竹口睦郁　図版／ジェオ
本書には専門ウェブメディア「韓ドラ時代劇.com」と「ロコレ」に著者が執筆した原稿も生かされています。

第
1
章

禁断の宮殿で愛と欲望は どれほど壮絶だったか

1 「名君の嫁」はなぜ王宮で背徳の行為に溺れたのか

朝鮮王朝の4代王といえば、言わずと知れた世宗（セジョン）である。ハングルを創製して「史上最高の名君」とも称されるが、後を継いで5代王となった息子の文宗（ムンジョン）は、とても影が薄い人間だった。

父親があまりに偉大すぎて過剰な重圧を受けてしまったのかもしれないが、結婚で失敗ばかりしていた。

文宗は１４１４年に生まれたが、結婚したのは13歳のときだった。彼は世子（セジャ／国王の正式な後継者）だったので、早めに世継ぎを作ることを宿命づけられていたのだが、その割には子づくりに熱心ではなかった。

世子嬪（セジャビン／世子の妻）の金氏（キムシ）は4歳上だったが、世子は金氏の部屋をまったく訪ねなかった。

これでは子供ができるわけがない。

金氏はかなりあせっていた。
夫の気を引こうとして、媚薬ばかり準備した。それは、蛇やコウモリを干して粉末にしたものが多かった。
金氏があまりに熱心だったので、そうした媚薬づくりが王宮の中で噂になってしまい、金氏に変な評判がたつようになった。口の悪い女官からは「魔女」のように言われてしまったのだ。
噂に尾ひれがついて、とうとう金氏は世子の妻として失格という烙印を押され、実家に帰されてしまった。その後、金氏と父親は自決したと伝えられている。不名誉を恥じたのである。
しかし、文宗にも責任の一端があった。妻のことをあまりにも無視しすぎた。その末の「媚薬づくり」であったのに……。
次に世子の妻として迎えられたのは奉氏（ポンシ）だった。
彼女は名門の娘として大いに期待されたのだが、世子はあまりにそっけなくて、またもや妻に関心を示さなかった。
そんなことがずっと続いた。失望した奉氏は寂しさに耐えかねて女官と同性愛の関係に

陥ってしまった。

こういった話はすぐに広まっていく。結局、奉氏も離縁させられてしまった。このように、世子の妻は2人とも、あまりに不幸だった。男性としての世子に問題がありすぎたかもしれない。

少なくとも、妻が「奇行」や「同性愛」に走ることは避けなければならなかった。その上での離縁は、なんとも気の毒だ。

最終的に世子は娘と息子を持つに至った。2人の子供を産んだ女性は、１４４１年に息子（後の端宗〔タンジョン〕）を産んだ直後に亡くなった。後に顕徳（ヒョンドク）王后として追尊されている。

世子は１４５０年に文宗として即位したが、わずか2年で世を去った。頭脳は明晰だったが、とにかく生命力が乏しい人だった。

2　女官にとって厳禁となっていた「鉄の掟」とは？

韓国時代劇で一番多いのは朝鮮王朝を描いたドラマだ。そうなると、王宮を舞台にした宮廷劇が圧倒的に目立ってくる。

その中では女官がひんぱんに登場する。彼女たちが国王や王妃の側近として王族の生活を支えていたからだ。

そんな女官は16世紀前半には王宮に1千人ほどいたと推定されている。彼女たちはどんな生涯を送ったのだろうか。

女官は早ければ5歳くらいから見習いとして王宮の中に足を踏み入れる。しかし、家族や先祖の中に罪人がいたり自分が病気がちだったりした女の子は、宮中の門をくぐることが許されなかった。

運よく女官の見習いになると、緻密な徒弟制度の下、厳格な教育を受ける。そして、見習いの期間中は多くの仲間たちと共に過ごし、大部屋での共同生活が続いた。

厳しい修業を乗り越え18歳を迎えると、見習いたちは内人（ナィン）としての新しい生活を始めた。

いわば、一人前と認められたのだ。そして、成人後はそれぞれの分野……たとえば料理、衣服、洗濯、刺繍などの部門に分かれて、専門的な業務を担当した。

同時に、女官は国王と共に歩む運命が宿命づけられており、原則として「国王と結婚した」と見なされている。

他の男性との恋愛は絶対に禁じられていた。そればかりか、彼女たちの日常は「鉄の掟」に縛られていた。もしも女官が男性と肉体関係を持ったときは男女とも処刑されてしまうのだ。

このような極刑が広く行き渡っていたので、王宮内で女官に手を出す男は稀であった。しかしながら、覚悟の上で禁断の恋に身を投じる者も現れる。それは「命をかけた壮絶な愛」であった。

その先には恐ろしい極刑が待っているとしても……。

さらに、女官たちは王宮の外への自由を持たなかった。その生活の舞台は王宮の内部だけであった。

それゆえ、同性愛が多かったと言われている。

そんな女官の最大の野望は国王の側室になることだ。

朝鮮王朝時代の前期では、国王が10人前後の側室を持つことが一般的で、女官から側室になる女性も少なくなかった。

しかし、よほど美貌に恵まれなければ、側室選びのスタートラインに立てない。多くの女官には厳しい現実が待っていたのだ。

精進して働いても、大半の女官は年を取ると王宮を出されてしまう運命だった。老後の保証もなく、すでに知り合いも世間には少なくなっていた。それだけに、晩年は寂しくなる女官が多かったことだろう。それでも彼女たちは幸せな人生を送ったと言えたのだろうか。

3　伝説の医女が王妃を気遣って犯した規則違反が強烈だ

イ・ヨンエが『宮廷女官 チャングムの誓い』で演じた主人公チャングムは実在した医女であり、朝鮮王朝の正式な歴史書である『朝鮮王朝実録』では「長今（チャングム）」として出てくる。

記述部分があるのは10カ所ほどだが、最初に登場するのは１５１５年3月21日である。「医女の長今は功績があったので当然のごとく褒美を受けるべきだが、問題が起こって未だに褒美をもらえない」と書かれている。

さらに翌日の記述では「医女である長今の罪は大きい。産後に王妃の衣装を替えるとき、それをしないでおくとは、どういうことなのか」となっている。

このように、長今は厳しく非難されている。

なぜ、そんなことになったのか。

ここで言う王妃というのは、11代王・中宗（チュンジョン）の二番目の王妃だった章敬

（チャンギョン）王后である。彼女は１５１５年に中宗にとって待望の息子を産んでいる。その出産時に子供を取り上げたのがチャングムなのである。彼女はそれほど重責を担う医女であった。

当時、出産直後の王妃は服を着替えるのが習わしだった。しかし、長今はそれをさせなかった。なぜなのか。

おそらく、難産で体力が衰弱していた王妃の身体を気遣ったからであろう。着替えをすると身体が冷える恐れがある。そのために、長今はあえて慣例に従わなかった。

ところが、章敬王后は産後の肥立ちが悪くて、すぐに亡くなってしまった。

朝鮮王朝では、王族が命を落とすと関わった医師が処罰された。必然的に長今も処罰を免れなかった。

さらに、「着替えをさせなかった」という罪も重なったのだ。医女を罷免させられて監獄に入れられても不思議ではなかった。

しかし、長今は以後も医女を続けることができた。そこまで信頼されていたのである。

4　中宗の臨終を看取った大物は意外な人物だった!?

11代王の中宗（チュンジョン）は、王子時代には晋城大君（チンソンデグン）と呼ばれていたが、異母兄の燕山君（ヨンサングン）が１５０６年にクーデターで廃位になったあとに王位に就いた。

『朝鮮王朝実録』によると、１５４４年の秋になって体調を崩してしまった。そのとき、中宗のそばで診察していたのが、あの長今であった。章敬王后の出産時に王妃の服を替えないで処罰されてから29年が経っていた。

それほど長く医女として王族に仕えていた長今。中宗が「余の病状は長今が知っている」と語っているほど信頼を寄せられていた。そんな彼女の名前が『朝鮮王朝実録』で最後に登場したのは、１５４４年10月29日だった。そこでは、「朝、医女の長今が内殿から出てきて言った。『殿下の下気（便通がよくなること）がやっと通じて、とても気分がいいとおっしゃっておられます』」と書かれている。

歓慶殿（ファンギョンジョン）で長今（チャングム）が
中宗（チュンジョン）を診察した

歓慶殿の隣にある景春殿（キョンチュンジョン）も
王族女性たちに日常的に利用された

以後も、長今は中宗の主治医のそばに付いて国王の診察に当たっている。しかし、10月29日の記述を最後にして、『朝鮮王朝実録』から長今という名前は見られなくなった。それでも、「医女」という記述はひんぱんに登場する。

前後の文脈からして、この「医女」が長今であったことは明らかだ。それほど彼女は集中して中宗の診察に取り組んでいた。

中宗は１５４４年11月14日に病状が悪化し、11月15日には危篤となった。『朝鮮王朝実録』では「危篤で話すこともできず、そばにいる人が誰なのかもわからない状態となった」と記されている。

そして、中宗はその日の夕方に息を引き取っている。間違いなく、長今も中宗のそばにいて最期の瞬間を看取ったことだろう。

朝鮮王朝は人間の身分の違いを容認する儒教を国教にしていて、男尊女卑の傾向が顕著だった。

そんな時代に医女として国王の診察をしていた長今は、とてつもなく有能な女性であったに違いない。

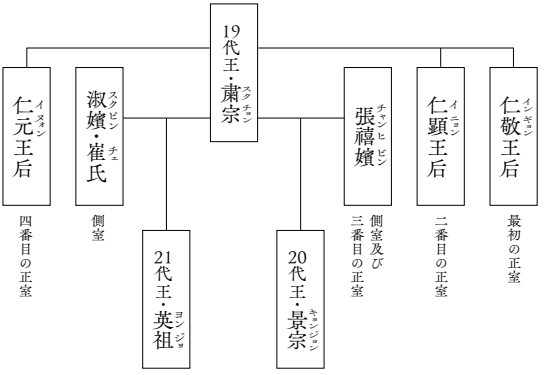
5 側室同士の強烈なライバル対決の結末は？

1701年8月に仁顕王后が亡くなったとき、「張禧嬪が王妃を呪詛していた」と淑嬪・崔氏が告発した。

淑嬪・崔氏の証言を受けて、粛宗（スクチョン）は張禧嬪を糾弾している。たとえば、1701年9月23日に記録された『朝鮮王朝実録』によると、粛宗は次のように語った。

「張禧嬪は就善堂（チソンダン／張禧嬪の住居）の西側に密かに神堂を建て、いつも2、3人の怪しげな者たちと（呪詛のための）祈禱をしていたという。こんなことが許されるなら、いったいどんなことが許されないというのか」

このように憤慨していた粛宗。そこに至るまでの経過をイラストで解説しよう。



19代王・粛宗（スクチョン）が絶世の美女だった女官の張禧嬪（チャン・ヒビン）を側室にした。

張禧嬪は1688年に王子を産んだ。子供を産んでいない仁顯（イニョン）王后の立場が不利になった。

張禧嬪の産んだ王子を後継者にした粛宗は、臣下たちの反対を押し切って「王妃を離縁する」と宣言した。

王妃になった張禧嬪は傲慢(ごうまん)になった。嫌気がさした粛宗が新たに側室にしたのが淑嬪・崔氏(スクピン・チェシ)だ。

1694年、張禧嬪の兄が淑嬪・崔氏を
毒殺しようとした事件が発覚する。
驚愕した粛宗は
張禧嬪を側室に降格させた。

空いた王妃の座に
仁顕王后を
復帰させよ！

仁顕王后が
1701年に亡くなると
淑嬪・崔氏から告発があった。

王妃を呪い殺したのは
張禧嬪です

ナニ〜

激怒した粛宗は
張禧嬪に死罪を命じた。

張禧嬪を生かしておくわけにはいかない

こうして張禧嬪は毒を
飲まされる羽目になった。

なぜ私が死ななければならないのか

張禧嬪が産んだ世子は
後に景宗（キョンジョン）として即位。
彼女は死後に国王の母になった。

後日談として解説を付け加えよう。粛宗が張禧嬪に死罪を命じたとき、臣下からは相次いで反対意見が出た。

「寛大な処分をお願いします。世子のためにも、そのほうがよろしいかと……」

それが重臣たちの意見の総意であった。

なにしろ、張禧嬪は世子の生母なのである。将来の国王の母親を自害させることは、後の禍根の原因にもなりかねなかった。

しかし、粛宗は強硬だった。１７０１年10月８日の『朝鮮王朝実録』には粛宗の次の言葉が載っている。

「張禧嬪が王妃に嫉妬して、宮殿の中や外に神堂を設置して、日夜祈願をしながら凶悪で不潔なものを埋めた。実に狼藉なことで、憤慨するばかりだ。これをそのまま放置すれば、後日に国家の懸念となる。よって、張禧嬪を自決させよ。もちろん、余が世子のことを考慮しないわけがない。熟慮した結果、すべきことが明確になったので、この処分を全うするしかないのだ」

こうして張禧嬪は粛宗の厳しい王命によって死罪になった。

6　国王に寵愛された側室の栄光と喪失は隣り合わせ！

韓国ドラマの視聴者から「好きな時代劇」のアンケートでかならず上位に選ばれる傑作『トンイ』。ハン・ヒョジュが演じたヒロインのトンイは、ドラマ用に作られた名前だ。実在したモデルは淑嬪・崔氏である。

彼女は19代王・粛宗の側室として息子を3人産んでいる。最初の息子は１６９３年にこの世に誕生し、永寿君（ヨンスグン）と命名された。この子の名前は「長寿」を願う深い愛情に満ちたものであった。粛宗は我が子の誕生を心から喜び、その喜びは『トンイ』でも繊細に描かれていた。

しかしながら、「長寿」とは無縁だった。

なんと、永寿君はわずか2カ月でこの世を去ってしまったのだ。粛宗と淑嬪・崔氏の悲しみはあまりに深かった。

淑嬪・崔氏は再び妊娠し、翌年に粛宗の息子を出産した。この子は順調に育っていった

が、張禧嬪が産んだ息子がすでに世子となっていたために、将来の国王の座を獲得するのは難しかった。

しかし、運命は予想外の方向へと進んだ。張禧嬪の息子は粛宗が亡くなった１７２０年に景宗（キョンジョン）として即位したが、はからずも短命であった。それによって、淑嬪・崔氏の子が１７２４年に英祖（ヨンジョ）として即位することになった。ついに淑嬪・崔氏は国王の母となったのである。

ただし、彼女は１７１８年に世を去っているので、息子が国王になったことを生前には知らなかった。

なお、淑嬪・崔氏には他に３人目の息子がいたが、あまりに早く亡くなっているので、名前さえ記録に残されていない。

結果として、淑嬪・崔氏は３人の子を産んだものの、２人が早世してしまったのだ。英祖の誕生は彼女に最高の喜びを与えてくれたのだが、他の２人の早世は無限の悲しみをもたらした。

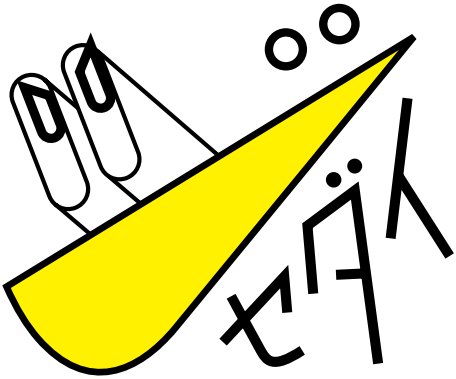
7　哲仁王后の性格はドラマとどのように違うのか

ドラマ『哲仁王后〜俺がクイーン⁉〜』は、韓国大統領官邸のシェフの魂が朝鮮王朝時代の哲仁（チョリン）王后の心に入り込んでしまうという話だ。

ドラマの序盤では、王妃がまるで男性のようにふるまうので、そばに付いている女官たちが混乱してしまう。そんな騒動が大いに笑いを誘うのだが、そもそも、心の中に男が入り込んでしまった王妃とは、本来はどんな女性だったのだろうか。そのことがとても気になるので、史実をひもといて哲仁王后の人物像を明らかにしてみよう。

『哲仁王后〜俺がクイーン⁉〜』では第3話で王妃に仕えている女官のホンヨン（チェ・ソウンが演じている）が「王妃がどんな方なのか」を語っている場面があった。それによると、王妃はとても気難しい性格で、周囲が少しでも騒いでいるとあからさまに激怒するタイプだった。それは、史実でも同じだったのだろうか。

哲仁王后は１８３７年に生まれている。彼女は当時の朝鮮王朝で絶対的な権力を握って



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!